

国内事業の活動報告



自社の理念を紐解き、SDGsに繋がっていきます



SDGs導入支援（経営戦略支援プログラム）

SDGsアクションプラン作成を始めた企業数 **3社**

時期：2020年1月～現在

SDGsを経営に取り入れたい中小企業への支援として「SDGs経営戦略支援プログラム」を展開しています。SDGs企業行動憲章をつくり、その達成に向けたアクションプラン（行動計画）をつくるために、SDGsに関するセミナーや社員さんとのワークショップなどを実施します。社員さんでつくったタスクチームで会社の未来像や果たすべき社会的役割などを話し合い、最終的に経営陣に提案するという流れです。

2019年度は、(株)サガプリンティング様(佐賀市)、(株)西村商店様(上峰町)、田島興産(株)様(佐賀市)の3社がプログラムに着手。コロナウイルスの影響で年度中のプラン完成には至りませんでした。 「とても良い人づくりの機会でした」「提案を経営陣は真摯に受け入れてくれ、ずっとこの会社で働きたいと思いました」などの感想をいただきました。



自分の興味あるSDGsの番号を発表してもらいました



地元の龍谷学園と提携しSDGsを生徒へ伝えました

22回の講演および授業を、 生徒延べ**2520名**、教師**80名**に実施しました

時期：2019年4月～現在

2019年6月に協定を結び、授業の中でSDGs基礎からワークショップまで行いました。講演を聞き、自分の興味のあるSDGsの番号を更に深く調べ、最後はクラスで発表するというところまで行っています。それぞれ、自分が行っている活動が地域だけでなく、世界にも繋がっていることを理解することで自分が何のために活動をしているかがより理解できたと言います。また、佐賀県内でSDGsに取り組んでいる企業や行政の取り組みを集約した「SDGsアクションブックさが」も龍谷の生徒にも協力をいただき制作しました。(ネットで「アクションブックさが」で検索するとダウンロードできます)



記念講演には80名を超える人が集まりました



SDGs官民連携円卓フォーラムを設立しました

官民代表者**10名**と設立をしました

時期：2019年10月～現在

SDGsを単体だけでなく、すべてのセクターで広げていくことを目的として同フォーラムを立ち上げました。理事メンバーには行政、大学、マスコミ、組合の方々で構成され、今後SDGsを佐賀県内に普及するための議論を行っています。

設立時には、記念イベントとして日本総合研究所の方にご講演をいただきました。2019年度の途中から、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、イベント等は延期になりましたが、次年度以降は様々なイベントなどを行い、普及活動を行っていきます。



豪雨被害にあった自宅の掃除を行いました



令和元年佐賀豪雨の支援を行いました

NPOを中心とした51団体と佐賀豪雨支援

時期：2019年8月～現在

2019年8月下旬に発生した豪雨により佐賀県では大きな被害を受けました。これまで、経験したことのない豪雨で冠水するところが相次いで出ていました。その中で当会も賛同している佐賀災害支援プラットフォームは被害を大きく受けた5市町を中心に、物資やボランティアの派遣を行いました。また、県外からの支援をニーズがある場所へ誘導など中間支援の機能を果たしました。佐賀は災害が少ない県として県内外からの見方でしたが、今後はどこで起きてもおかしくない事態になっています。新型コロナウイルス感染症も重なり、今後は地域内で支援できる仕組みが必要となってくるかと思っています。



外で思い切り遊びました

子どもの居場所づくり事業

2019年度に居場所を訪れた子どもの数 456名

時期：2017年8月～現在

3年目になった子どもの居場所も、毎月遊びに来る子どもの顔ぶれも同じようになり、その子どもたちにとって家庭、学校に次ぐ第三の「居場所」になっています。実行委員会の地域の方々も毎月来る子どもの顔はすっかり覚え、道端で会っても挨拶ができる関係づくりができています。また、実行委員会のメンバーに新たな方も増え、少しずつですが、地域の大人が地域の子どもの見守り、育む形ができています。

この居場所が長く継続的に続いていけるように当会としてもサポートを行っています。

(委託先：佐賀市)



夢の学校の子どもたちへSDGsを伝えました

リベラルアーツ（講師派遣）

ワークショップに参加した児童数 100人以上

時期：2019年4月～

小学校の時から地球市民としての視野を養ってもらおうと、同じ事務所で開かれる放課後スクール「夢の学校」で、地球市民の会スタッフによる「リベラルアーツ」（教養教育）を行いました。授業では、各事業の担当に基づき、SDGsに関するすごろくをしたり、チャンマーの奨学生に手紙を書いたり、災害時に在住外国人に伝わりやすい「やさしい日本語」について学んだりしました。1年間で延べ100人以上の児童に、世界で起きている問題について考えてもらう機会を提供しました。

担当者コメント

岩永清邦（事務局長）

昨年度は、SDGs推進事業を、様々な団体等と連携して実施しました。これまでなかなか接点がなかった企業様や学校関係者とも繋がることができ、改めてSDGsが共通言語ということを実感しています。また、佐賀は災害が少ない県と言われていましたが、2019年8月の豪雨災害、2019年度末には新型コロナウイルス感染症と災害、感染症と大きく時代の変化が起きている局面とさえ感じます。

今こそ、SDGsの旗印のもと、様々な団体とより密に連携してこの難局を乗り越えて行きたいと思っています。

※持続可能な開発目標（SDGs）は、「誰一人取り残さない」世界の実現を目指す、2030年までの国際目標

国内事業の活動報告



介護施設の入所者さんと交流するYuさん(右)

志学生プロジェクト

タイの貧困を解決する介護留学事業が スタートしました

時期：2019年4月～



1990年から始まったタイ東北部での奨学金事業。当会を象徴する事業の一つでしたが、タイの経済成長により「地球市民の会としての役目は終わった」として、2018年春で終了しました。しかし、タイでは格差が広がり、日本以上のスピードで少子高齢化が加速。「何か別の形でタイと事業展開ができないか」と模索し、2019年度からスタートしたのが、介護留学事業「志学生プロジェクト」でした。

同プロジェクトでは、介護事業所ライフサポートNEO様と、「Be Family プロジェクト」で協働してきた「タイ日人材育成協会」(南部ナコーンシータンマラート市で柳川タイ中学校を運営)と連携。協会が推薦した学生が日本へ留学し、日本語学校、介護福祉士養成のための短大へと進学します。ライフサポートNEO様は、この学費を「貸与型奨学金」として貸与し、学生に介護施設でのアルバイトの仕事を提供していただきます。学生は働きながら日本語と介護技術を習得するとともに、アルバイト代から少しずつ奨学金を返済するという仕組みです。将来的に、タイで介護施設の需要が高まったときに施設の責任者として働くことで、貧困の連鎖を断ち切ろうというプロジェクトです。

第1号として2019年4月に来日したのが、Thanompol Uranutさん(ニックネーム：Yuさん)です。Yuさんは幼い時に両親が離婚。お母さんは女手一つで5人きょうだいを育てようと、事業をするも失敗してしまいます。Yuさんは大学進学も諦め、お母さんの借金を一緒に返そうとしていたときに、志学生プロジェクトを知ります。「自分の人生を日本へ行って変えたい」。その思いで、現在、日本語と介護施設での仕事を頑張っています。

第2号の学生も2020年4月に来日予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で、来日が延期となっております。また彼女も佐賀で生活ができるように、コロナウイルス終息を見越した準備を進めていきたいと思っております。

ライフサポートNEO 吉田和正さん



弊社は地球市民の会のタイの農村部の学生を支援したいという思いに共感し、一緒に活動しております。志学生第1号のYuさん(ニックネーム)は、介護業務に関しても覚えが早く、利用者様たちからも「YuちゃんYuちゃん」と声をかけて頂き、皆さん笑顔で接して下さっております。職員からしても妹のような存在で、一緒に語学の勉強をしたり、介護の勉強をしたりと毎日、楽しく過ごされているようです。

今回は来日にあたり、家具や衣類などのご寄付をいただき、ありがとうございました。2020年度の学生は、新型コロナウイルスの影響で来日が遅れておりますが、介護の技術を身に着けることで、一人でもタイの若者が明るい未来を築けるように、手助けをしていきたいと思っております。

担当者コメント

山路 健造 (国内事業担当)



2019年度より、タイ事業は新たなプロジェクトを始めることができました。「タイの貧困の連鎖を解決するとともに、日本の社会問題についても同時に解決できるようなプロジェクトを進めていく」をコンセプトに、日タイで社会問題を解決するパートナーとして、ともに活動していければと思います。また、留学生たちのために、家具や自転車などをご寄付いただき、ありがとうございました。お陰様で、楽しく日本で生活できています。

奨学金事業の活動報告



スリランカ、ミャンマーの123人の高校生を支援



2019年度の地球市民の会奨学金支援では、160名のさとおやさん（支援者）にご支援頂き、スリランカ40名、ミャンマー83名の高校生を支援することができました。

スリランカでは、2019年4月に旧首都コロンボにて爆破テロが発生し、一時国内の情勢が不安定となりましたが、そんな混乱の渦中でも子どもたちは安全を守りつつ勉学に努め、高校最終学年のさとご10名は無事高校を卒業することができました。

ミャンマーでは、当会が運営するタンボジセンターで暮らし、農業を学びながら学校へ通う「タンボジ奨学金」にて2学年17名のさとごを支援し、2019年3月に9名のさとごが高校卒業を迎えタンボジセンターを巣立っていきました。

また、経済的困難を抱えつつ自宅から学校へ通う通学生を支援する「シャン奨学金」は、2019年4月より、僧侶または地域の有志が運営する子ども寮に住む高校生への支援に変更となりました。子ども寮に住む子どもの多くは、「自分の村に中学校までしかない」「町の学校に行くための寮費が高くて払えない」などの事情から、学校に行くことを断念せざるを得ない境遇にありました。子どもたちは子ども寮で生活し、僧院学校や寮から近い公立高校で学んでいますが、寮は寄付で運営されており、決して豊かな生活とは言えません。「シャン奨学金」では、学ぶ喜びを噛み締めながら勉強に励む子どもたちの未来を支える力となるよう支援を開始し、2019年4月より1学年30名のさとごを支援しています。

子どもたちにとってさとおやさんは「日本の家族」であり、「困難へ立ち向かう励み」です。地球市民の会の奨学金支援では、さとごさとおやさんの心をつなぎ、一人でも多くの子どもたちが教育の機会を得て、豊かな人生を送ることができるよう支援を続けていきます。

担当者コメント



マ・ワー・ワー・ライン（タンボジ農業畜産研修センター センター長）

日本のさとおやの皆さまのご健康とご多幸をお祈りしています。外国にいる子どもたちを、大きな志で支援してくださって、本当に嬉しいです。世界中で新型コロナウイルスが流行していますが、さとおやさんからたくさんご心配の声をいただき、ありがとうございます。将来の農村リーダー育成のために、これからも一生懸命尽くしていきたいと思っています。自分の国、自分の民族のために、できる限り私は頑張ります。ご支援いただいているさとおやさんに、国を代表して、子どもたちを代表してお礼を申し上げます。ご健康に気を付けてお過ごしください。



秀島 彩女（奨学金事業担当）

奨学金事業を通して改めて人とのつながり、思いやりの大切さを感じました。子どもたちの切実に学びたいという思いやさとおやさんへの感謝の思いを、みなさんに届けたいという一心で事業に取り組みました。日本と海外という遠く離れた場所においても双方の温かな思いやりの心が感じられる事業となりました。奨学金事業をご支援いただいたみなさま、心から感謝しています。

ミャンマー事業の活動報告 (シャン州)

堰から各所へ配水する水門が完成



全長183mの堰を整備し乾季でも農業を可能に二期作の実現で農民の所得向上へ

ナウンカ地域 農業堰建設

時期：2018年10月～現在

ナウンカ地域では住民の9割以上が農業を営んでいます。しかし灌漑設備がないため雨季の天水に頼った農業をしており、雨が降らない乾季には作物栽培ができず、収入に大きく影響しています。また、雨季の時期が遅れると適正な時期に種をまくことができず、収量が減ってしまいます。

こうした課題に対し、年間を通じて農作物の栽培ができるよう、2年間かけてこの地域に農業堰と農地への配水路を整備しています。いつでも使用できる農業用水が確保されることで安定した収量も見込めます。事業終了後は地元の人たちが管理していけるよう、地域の首長をはじめとする維持管理委員会を組織し、水使用規則などの策定も行っています。

(助成元：外務省 NGO 連携無償資金協力)



地域の首長で構成される堰建設委員会との話し合いの様子

年間を通して
水が利用できるようになる人
4村711世帯
農地 **280ヘクタール**



タンボジセンターに来て以来、初めて水が出たのを見た子もいました

センターで暮らす子ども **約20人**

地域農業を支える力として
ミャンマーの農村を担う若者を育成するために

タンボジセンター井戸修繕

時期：2019年10月～2020年1月

地球市民の会が運営するタンボジ農業畜産研修センターでは、循環型農業を実践するデモファームを整備しつつ、経済的困難から学校に通えない村の高校生を受け入れています。そんなセンターに水を供給していた山の上の水源が枯れ、更に深井戸は老朽化により十分な揚水ができず、深刻な水不足に陥っていました。地球市民の会では、皆さまのご寄付で新しい井戸を掘り、生活する子どもたち、地域農業を支える水環境の整備を行いました。

(タンボジ井戸掘募金へのご寄付：個人寄付者6名)





インレー湖の嫌われ者「ホテイアオイ」を堆肥化するソーシャルビジネス

ホテイアオイ堆肥化と土壌流入防止

時期：2019年4月～現在

インレー湖の水面には、外来種の水草ホテイアオイが大量発生しています。通船障害を引き起こしたり、湖の生態系を変えてしまったりするホテイアオイに、地元の人たちは困り果てています。嫌われ者のホテイアオイを除去するため、陸地に引き揚げ、堆肥を作って農業に活用する事業を行っています。ホテイアオイには窒素が豊富に含まれているため、堆肥に適しているのです。現在は、有効成分が豊富で、コストを抑えた堆肥を作ろうと奮闘中。数年後には、新たな助成金の投入なしに、堆肥の売上だけで継続できるソーシャルビジネスとなることを目指しています。また、インレー湖への土砂流入を防ぐために、地元の人たちと協力して植林と雨季のコメ作りも行っています。

(助成元：日本国際協力財団、緑の募金)

引き揚げたホテイアオイの量
40トン

植林本数 **7,000本**

雨季植えを行った田んぼ
130エーカー



暮らしを取り戻すために 子どもたちの「学び」を守るために

モン州豪雨災害支援

時期：2019年8月～2019年10月

2019年8月に発生した豪雨により、ミャンマー南東部にあるモン州では大規模な土砂崩れや浸水被害等が発生しました。一部の地域は道路の寸断により取り残され、支援物資が届かないといった事態も発生しました。地球市民の会では募金を呼びかけ、甚大な被害を受けた村の学校4校に、机と椅子や、制服や文房具などを寄付しました。浸水により井戸水が汚れてしまった学校へは、子どもたちが安全な水が飲めるように浄水器を寄贈しました。

(モン州豪雨災害支援募金へのご寄付)



ミャンマー事業の活動報告 (シャン州)



インレー湖調査の様子

インレー湖の環境をデータに基づいて保全する

インレー湖環境汚染調査

時期：2017年4月～2020年3月

インレー湖の環境問題について取り組む団体は多くありますが、これまで科学的なデータの整備が不十分でした。そこで本事業では、東洋大学の先生方にご協力いただき、インレー湖の水質調査や村落調査、観光業者への聞き取り調査などを実施。地元の環境活動団体や政府担当者を招いたワークショップを実施し、集まった情報を共有しました。3年間の事業はひと段落しましたが、今後もインレー湖の環境保全活動を続けていきます。

(助成元：三井物産環境基金)



ワークショップの様子



ワークショップ実施回数
1年間に3回
参加者数 延べ**104人**



完成したナウンサン小学校のトイレ

トイレがキレイだと
学校に通うのが楽しくなるネ!

ナウンサン小学校トイレ建設

時期：2020年1月～2020年3月

久居ライオンズクラブ様には、2017年にナウンサン小学校の校舎建設をご支援いただきました。その後、ナウンサン小学校からトイレが無くて困っているという話が出たため、追加でトイレ建設のご支援をいただきました。1回で終わりではない関係が築けています。

(支援者：久居ライオンズクラブ)

トイレを使えるようになった生徒数
35名





タンボジセンターに設置された
ハトムギの殻を剥く機械

日本企業と契約栽培を進め農家に安定収入をもたらす

ハトムギ栽培・加工

時期：2017年5月～現在

これまで、シャン州の多くの農家はトウモロコシ栽培を行ってきましたが、トウモロコシは中国の需要に大きく左右され、価格が安定しません。価格が下がった年には赤字になることもよくあります。そこで、日本の企業と協力して、ハトムギの契約栽培を進めています。事前に買い取り価格が決まっているので、農家は安心して栽培することができます。農家が作ったハトムギを地球市民の会が運営するタンボジセンターに集荷し、当会スタッフが加工をした後、日本まで送っています。

(協力先：西田精麦株式会社)



買い取ったハトムギの量 **185トン**



ミャンマー人スタッフたちが
今後の在り方について議論する様子

日本からの支援が終えても 地域住民主体で地域を支えていくために

現地 NGO (TPA Myanmar) 自立支援

時期：2019年4月～現在

これまで17年にわたりシャン州での活動を続けてきましたが、2022年を最後にシャン州での活動を終了します。その後は、現地スタッフを中心に設立した「TPA Myanmar」という現地 NGO が活動を続けます。TPA Myanmar がスムーズに活動できるよう、今から事業計画や資金計画の作成を始めています。「国際協力の理想は、国際協力が必要なくなること」と言われますが、その理想の形に近づいていきたいです。



ミャンマー人高校生たちと
早朝から一緒に農作業も体験しました

地球市民の会の活動地を訪問 農村の暮らしを体験し「豊かさ」を考える

スタディツアー

時期：2019年8月

現地の課題を知り、それに取り組む私たちの活動を知ってもらうことを目的としたスタディツアー。2019年度は全国各地から13名の参加者がミャンマーを訪れました。文化だけでなく、現地の人たちの生活に潜む課題を目の当たりにすることで、「平和とは何か」「豊かさとは何か」をそれぞれ考え深める機会となりました。今回は奨学金事業で『さとおや』として現地の高校生を支援してくださっている方も参加され、他の参加者からは「自分たちに身近にできる支援について考えさせられた」という感想も聞かれました。

参加者 **13名**

※持続可能な開発目標 (SDGs) は、「誰一人取り残さない」世界の実現を目指す、2030年までの国際目標

ミャンマー事業の活動報告 (チン州)



政府関係者や多くの住民が参加した落成式

1年をかけて地域開発の拠点が完成
循環型農業・栄養研修をスタート

ライレンピー持続開発研修センター建設・運営

時期：2018年10月～現在

ライレンピー町と周辺の村々では、過度な移動式焼畑が続けられてきたことが原因で農作物の収量が以前よりも大きく落ち込んでいます。何とか焼畑から脱却したいという農民が多くいるものの、知識や技術がないため仕方なく焼畑を続けている状況です。

そこで私たちは、循環型農業技術の普及拠点となる「ライレンピー持続開発研修センター」を建設しました。また、約2.4haのデモファームも整備。地球市民の会がチン州で初めて運営する研修センターとなります。

ライレンピー持続開発研修センターでは、シャン州で循環型農業を学んだスタッフが講師となり、3日間・7日間・1カ月間の3タイプの農業研修を実施。初級～上級まで幅広い知識・技術を指導しています。また、女性を対象とした栄養研修も開催しており、特に妊産婦や乳幼児の栄養改善に注力しています。今まではこのような研修の機会が無かったため、研修生たちは非常に熱心で、バイクで何日もかけて参加しに来る人も。研修センターが担う役割の大きさを感じています。

今後は農業研修と栄養研修を継続するとともに、養鶏・養豚を行うための設備を整備します。また、デモファームで収穫した野菜、農機具、日用品などの販売所をオープンし、多くの人々の日常生活を支える拠点になることを目指します。

(助成元：外務省 NGO 連携無償資金協力)

育成された農業指導者 **3名**

農業・栄養研修参加者 **75名**



デモファームでの農業研修



設置が完了した鉄条網と農地

移動式焼畑からの脱却への第一歩 家畜被害から作物を守るために

農地の鉄条網設置支援

時期：2019年11月～2021年12月

トゥイリン村では、移動式焼畑から脱却するためにコーヒー・コンニャク・アボガドなどの定住栽培を開始しました。しかし、近隣の村で飼育されている大型の家畜により、トゥイリン村で育てられていた苗木の多くが踏みつぶされる、食べられるなどの被害に。家畜の侵入を防ぐため、農地を囲う大量の鉄条網が必要でした。私たちは村の農業組合に対して鉄条網購入のための無利子貸付を実施。全長25kmの鉄条網で、約10haの農地を囲うことができました。

設置した鉄条網 **全長25km**





エンジニア（左手前）から工事の説明を受ける
維持管理委員会メンバー

山岳地帯の深刻な水不足 給水設備の整備で環境改善へ

ミンダ町飲料水・生活用水環境整備

時期：2020年1月～現在

ミャンマーの中でもインフラ整備が特に遅れているチン州。ミンダ町にある既存の給水施設は欠陥が非常に多く、町に住む1万2,000人が必要とする水を配水することができません。特に夏季には深刻な水不足に陥り、月に1～2回しか配水されないため、女性や子供たちの水汲みの負担が大きくなっています。また、衛生状態の悪化により感染症が蔓延し、命を落とす子どももいます。

このプロジェクトでは、水源から町内までの約22.4kmを結ぶ給水設備の整備を実施しています。取水タンク、浄化槽、貯水タンク、配水パイプ等を設置予定です。地元有志からなる維持管理委員会を中心に、建設完了後の管理体制の構築も進めています。

また、町内の子どもたちを対象とした衛生研修も実施します。日本人歯科医の協力も得ながら、水をいかに有効に使い、清潔・健康を保つかについて啓発活動を行っています。

（助成元：外務省 NGO 連携無償資金協力）

水環境が改善される人
12,000人
衛生研修に参加する子ども
2,000人



月に一度集まり、借入・返済を行う

“頼母子講”で資金集め 水のない学校に貯水タンクを

たのもしこう 頼母子講支援

時期：2019年5月～2020年4月

32人が学ぶチン州エタヤ準中学校には、水道がありません。トイレや手洗いで使う水は、子どもたちが学校の外へ汲みに行っています。子どもたちの学ぶ時間を守るよう、村の人々は頼母子講を立ち上げ、貯水タンクの建設資金を集めることに。頼母子講では、各メンバーが毎月一定額を積み立て、それを希望者が低利子で借りることができます。より多くの方が借入できるよう、私たちも原資を支援しました。支払われた利子を貯め、学校敷地内に容量5,100リットルの貯水タンクを建設します。

（個人寄付）

水環境が改善される子ども **32名**



ミャンマー事業の活動報告 (チン州)



町内にある水汲み場

大規模な給水設備の整備で
水不足・水汲みの負担を解消へ

ライレンピー町飲料水・生活用水環境整備

時期：2020年1月～現在

ライレンピー町では、既存の給水設備の欠陥が多いため、慢性的な水不足が問題となっています。配水されるのは一日に2回で、1回あたりの配水は2時間のみ。各家庭まで水道が整備されていないため、町内に数か所ある水汲み場まで行かなければなりません。水汲みは女性や子どもたちの仕事です。持てる限りの水を抱え、山岳集落ならではの急な傾斜道を歩いて家まで運ぶため、女性の流産にも繋がっています。重労働であるだけでなく、運べる水の量が限られるため、家族が一日に使用する水には到底足りません。

私たちはライレンピー町の水環境改善のため、水源から町までの給水設備を整備します。十分な水が得られるようになれば、水汲みの負担減、衛生環境の改善のほか、私たちが農業・栄養研修で指導する家庭菜園の普及にもつながります。

(助成元：外務省 NGO 連携無償資金協力)

水環境が改善される人
433世帯2,926人



新しい校舎を喜ぶ村の子どもたち

老朽化した学校を新しく
安心と安全の中で学ぶために

レーカウン中学校校舎建設

時期：2019年4月～2019年8月

レーカウン中学校は1946年に開校しましたが、木造校舎の老朽化が著しく、校舎全体が歪んでいました。また壁や床材は腐敗により隙間ができており、雨季には雨風が吹き込み、教科書や子どもたちも濡れ、授業をする環境としては劣悪な状態にありました。地球市民の会では、子どもたちが年間を通して安全に学ぶことができるよう、村の人々と協力し校舎とトイレ4基の建設を行いました。また、地域で学校を支えていけるよう、村人で編成された維持管理体制と学校基金の創出の支援を行いました。

(支援元：一般財団法人マイナビ世界子ども教育財団)

学習環境が改善された子どもたち
104人



コーヒーを軸としたアグロフォレストリー農法で
焼畑脱却、収入向上へ

ライレンピーアグロフォレストリー

時期：2018年7月～2019年6月

ライレンピー周辺では、過度な移動式焼畑による環境破壊と農作物の収量減少が長年の問題となっています。これらを解決するため、アグロフォレストリー農法によるコーヒーをはじめとした換金作物栽培を行い、森林保全と収入向上を同時に進めていく取り組みを開始しました。

モデル村2村を選出し、村内に育苗施設と給水設備を整備。日本人専門家による栽培研修に村のリーダーたちが参加し、いまでは彼らを中心に住民が協力して育苗、植林、農地の手入れを行っています。

2019年、ライレンピー周辺に居住するマラ族が「マラ農業組合」を結成。栽培地の拡大や販売先の開拓など、マラ族が一丸となってこのプロジェクトを進めていきます。コーヒーの収穫までにはまだ時間がかかりますが、標高1500メートルの高地で真心こめて栽培されたアラビカコーヒーを、ぜひお楽しみに！

(助成元：緑の募金)



コーヒー研修の様子

植林本数 5,000本



臨時教師による授業

村で唯一の教師が産休に
臨時教師を雇い授業継続を支援

臨時教師の雇用支援

時期：2019年11月～2020年3月

カーエイン村には、生徒26人が学ぶ準中学校があります。村が僻地にあるため教師たちは赴任したがらず、たった1人の女性教師がすべての学年を担当していました。しかしその教師が産休に入ることになり、授業ができない状況に。私たちの支援により、高校を卒業した地元の女性を臨時教師として雇い、授業を継続することができました。今後また同じような状況で困らないよう、学校基金を創出する体制も整えました。

(バースデッドネーションへのご寄付、保育園ひなた村自然塾)

学ぶ機会が守られた子ども 26名



ミャンマー事業の活動報告



地球市民の会の活動を通して
ミャンマー農村の暮らし・魅力を発信する

国内イベント・フェアトレード商品販売

時期：通年

ミャンマーの文化や魅力、農村地域の課題に取り組む私たちの活動を知ってもらうことを目的として、日本国内でのイベントへ出展しています。2019年度は佐賀県内での駐在員帰国報告会や、東京で行われた「ミャンマー祭り」へのブース出店、佐賀市内で行われた「タイフェスティバル2019」への出店を行いました。

日ごろ私たちの活動を支えてくださる方々をはじめ、地球市民の会の活動に興味を持ってくださる方、アジアやミャンマーの文化が好きな方々にたくさんお会いすることができました。

イベントにご参加くださった皆さま、お手伝いくださったボランティアの皆さま、心より御礼申し上げます。



担当者コメント



柴田京子 (ミャンマー国代表、プロジェクトマネージャー)

2019年は、2018年に開始したチン州事業が形となり始め、長年実施してきたシャン州事業の現地化が進みました。チン州では循環型農業普及の拠点となる「ライレンピー持続開発センター」が完成しました。この「持続開発センター」の名に込めた思いは大きく、地域住民による持続的な開発の実現を目指しています。「持続可能」という言葉はよく目にしますが、それを実現するのはとても困難です。しかし、シャン・チン共に現地スタッフ、地域住民と協力し持続可能な開発を実現していきたいと思っています。昨年度もご支援ありがとうございました。これからもミャンマーチームをよろしくお願い致します。



神崎涼子 (チン州ミンダ事務所プロジェクトアドミニストレーター)

チン州での事業開始から、2019年12月で1年が経ちました。ミンダ事務所とライレンピーセンターの2拠点で、地元出身のスタッフ10名とともに試行錯誤しながらプロジェクトを進めています。乾季は水不足で食器や服を洗えないし、四駆自動車はあまりの悪路に故障の連続。そんな環境ですが、住めば都。プロジェクトが増え、人のつながりが広がっていくことが楽しく、うれしい毎日です。日本の皆さまにチン州の魅力をもっと知っていただき、チン州ファンを増やしていきたいなあと思っています！



モー・モー・トゥエ (シャン州タウンジー事務所)

ミンガラパー。私は地球市民の会 (TPA) で働いて4年ほど経ちました。TPAで地域開発をやるのは楽しいです。困難もありますが、地域の発展のために働けるのは嬉しいです。

日本の団体であるTPAは、2022年にはシャン州南部から撤退することになっていますが、ローカルスタッフで現地NGO「TPA Myanmar」をつくり、継続して頑張っていきたいと思っています。国際NGOでは立ち入れない地域や難しい活動を、現地NGOとしてやっていきたいと思っています。